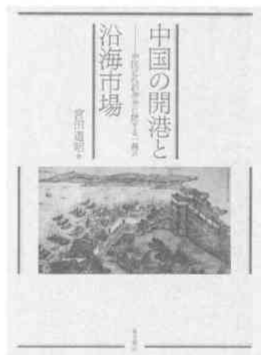


宮田道昭著

# 中国の開港と沿海市場

——中国近代経済史に関する一視点

東方書店 / 2006年2月 / 212頁 / 3200円



## 三好 章

日本の中国史研究において、明清史など他の分野同様に清末民初期の研究は世界的に高水準にあると言っても過言ではあるまい。それは、戦後まもなくから一九七〇年代にかけての研究の蓄積によるところ、とりわけ中華人民共和国の成立を歴史学的にどのようなとらえるかという問題意識から展開された社会経済史研究の果たしてきた役割が大きい。そして、現在はそれを批判的に踏まえてさらになる中国近代史研究の深化が続いている。しかし、本書のいう「文化大革命の余塵がなお残り、学界においても『革命史』的見方がきわめて強かった」（本書三頁）一九七〇年代後半以降、日本における歴史研究は、とりわけ日本近世史・西洋近代史を中心にアナール派の影響を色濃く受けた社会史研究が次第に隆盛となり、また文革によって露呈した人民共和国の前近代性に直面し、さらにスターリン主義批判に止まらぬ社会主義理念への懐疑の醸成は、中華人民共和国成立への道程に関してもそれまでのように「半

封建・半植民地」規定に従った後付け的整理への深刻な反省を迫り、そのために社会経済史とりわけマルクス主義歴史学の方法論に基づいた中国近代史研究は、次第にその影を薄くしていった。一九八〇年代以降、近代中国をフィールドとする社会経済史は、歴史的に一定の終着点、すなわち、中国共産党言い換えれば毛沢東による公式見解に沿った中華人民共和国の成立の前提を論証するのではなく、かえってそれらをもう一度検討の俎上に上せることによつて、自らの研究を問い直し、さらに中華人民共和国の現状を批判的に検討する視座を獲得しようとする努力を重ねてきたのである。

さらに付け加えれば、政治過多の中国において、文革に掲げられた理念と現実との乖離の極端な姿を見、さらに一九八九年に始まる一連の世界史の変動によつて、歴史事象の類型化は不可能事なのではないかとの疑念が生じるに至つた。さらに「世界史の基本法則」などはもちろんのこと、天下国家あるいは大所高所からの議論からではなく、強調されるのは

生活者の視点であつたり、家計簿からの世界史であつたりするようになった。しかし、こうした視点は天下国家や大所高所を決して無視していたのではなく、ミクロの視点からマクロを見抜く視角を獲得していたからこそ、社会史という新たな分野が中国近代史においても定着していったのである。もちろん、そうであるからといつて経済史研究、特に社会経済の構造的把握やマクロの視点が不要になるわけではない。ミクロの視点からの整理とは異なつた視角からの検討も、全体像把握には不可欠だからである。

本書は、そうした一九七〇年代初めに清末民初期の社会経済史研究に志した研究者のこれまでの成果を集大成した書物である。各章の初出一覧(二〇三頁)によれば、最も古くは第一章にあてられた一九八一年発表、最新のものは第四章にあてられた二〇〇二年発表のものである。この間二〇年以上の時間が流れているわけであるが、それは上述したように世界史の変動が展開し、中国近代史研究もその影響を大きく受けた時期であつ

た。したがつて、本書は著者の真摯な研究が時代の転換にいかに関わつていったかも垣間見せてくれるものである。本書全体の構成を同書の目次によつて示しておこう。

はしがき

序論 中国の開港と沿海市場

第一章 開港後における外国貿易品流通機構の一考察——ギルドの流通支配を中心として

はじめに

第一節 資料上に見る「中国商人の優勢」について

第二節 輸出品——茶・生糸

第三節 輸入品——綿布・アヘン

第四節 ギルドの独占利潤について

おわりに

第二章 十九世紀後半期、中国沿岸部の市場構造——「半植民地化」に関する一視点

はじめに

第一節 沿海貿易の歴史

第二節 十九世紀後半期の沿海貿易

(一) 南洋沿岸貿易  
(二) 北洋沿岸貿易

おわりに

第三章 広東省潮州地方における砂糖貿易の展開と地域社会——汕頭港の流通状況を中心として

はじめに

第一節 潮州地方について

第二節 汕頭開港以前の貿易状況

第三節 開港後における砂糖貿易の発展と潮州社会

おわりに

第四章 十九世紀中葉、上海における豆規銀本位制の成立について——中国在来の地域的通貨金融機構の一考察

はじめに

第一節

江浙地方の通貨体制と「銀貴」

(一) スペインドルの流通

(二) 銭莊手形——銭票・銀票

(三) 江浙における「銀貴」

第二節 上海の「銀貴」と通貨危機

第三節 豆規銀本位制の成立

おわりに

付編 もう一つの上海案内——魔都・上海

海戦・豫園

あとがき

索引

一瞥すれば明らかのように、アヘン戦争後、世界資本主義にリンクされた清末民初期の華中華南を考察のフィールドに設定した、手堅い社会経済史の手法による研究である。本書の内容を、目次に沿って大まかにまとめておこう。

一九九一年初出の論文に基づく序論では本書全体の大枠を提示するために、具体的な先行研究の整理を兼ねながら、著者がフィールドとした時代と地域について「十九世紀末以降、中国沿海各地の社会経済は対外依存的な性格を強め、人々の生活はアジアにおける国際分業体制のもとに組み込まれていった」(二九頁)ことを指摘する。もつとも、各章においてもそれぞれ「はじめに」で研究史の整理を行っており、また「序論」註(10)でも同様のことが行われている。本書の成り立ちが合計六本の既出論文によること

からやむを得ない面ではあるが、本書の研究史上の位置づけをより明確にするためにも、個別の章においてそれぞれの研究史の整理を行うことは最小限にして、全体にわたるものは一括して序章の本文においての方が良かったのではないかと若干悔やまれる。

さて著者は、先学が多く取り上げてきたミッチェル報告書の一節を引用し、開港後の「中国各地に地域間分業によるさまざまな商品交換関係が存在している」こと、それは中国沿岸地域に限っては「ヨーロッパ世界経済の周辺部に位置したのではなく、それに従属したのではない、正にその外側に屹立してそれ自身を中心のひとつの世界市場、世界経済を形成していたのである」(二二頁)と強調する。その際、著者の分析工具として「沿海市場」という概念を提示し、明代にはすでに「華々しいシナ海貿易の一方で、中国の沿海地域に地味ながらも堅実な沿海貿易が成長しつつあった」(一六頁)こと、清代には一時「外国貿易が抑制されていたのとは対照的に、中国沿

海地域において沿海貿易はかえって繁栄のピークを迎えていた」（一八頁）ことを指摘し、それは「江南地方を中軸として北は東北から南は広東に至る巨大な沿海市場が生まれた」（一八頁）との認識にいたるのである。そして、沿海貿易についての開港の影響を、筆者はマイナスとのみ考えず、「歴史の後戻りできない潮流であり、中国の社会経済や人々の生活にとっても新たな展開の可能性を与えた」（二二―二三頁）として、従来より積極的に評価しようとする。しかし、一八八〇年代以降、沿海部の市場構造に変化が現れ始め（二五頁）、「中国沿海地域に長期にわたって存在し、開港後には発展の兆候さえ示していた市場構造は十九世紀末に解体し、これに代わって、全く新しいアジア間貿易が形成された」（二七頁）と把握する。それは、上海の綿紡織工業などの経済発展の動きは「近代産業の出現に見られる沿海各地の周辺化の動きとは一見すると矛盾するように思われる」（二九頁）が、これが「十九世紀末以降、中国市場が世界経済に組み込ま

れていく中で同時進行していった」（二九頁）という。

第一章はもとは一八八一年初出の論文であり、本書の中では最も古い論考が土台にある。ここでは、タイトルに示されたとおり開港後の外国商品の流通構造の分析がおこなわれ、著者が先行研究の蓄積が薄いとす「中国商人とその流通機構」（三八頁）を検討する。その際、先行研究で多く扱われた「買弁」について、その語義を分析的に限定しつつ「西洋商會に属して、その売買取引を全面的に請け負っている」「貿易買弁」（三八頁）をとりあげ、「買弁」という言葉一つでその「売国的」という語感だけでもって、中国商人の歴史的役割を断罪することではなく、当時の大衆がどのような環境のもとで暮らしていたのか、その社会的環境を正確に理解する」（三九頁）ことを課題として設定する。つまり、従来の研究において歴史用語に過度に付着したイデオロギーを払拭することも、課題としているのである。そこで描かれるのは引用した史料から明らかであ

るが「中国商人はついに外国商會の助力なしで自信の取引を行いうるようになる」（四〇頁）り、「英国商人の忌みきらうものは、正に中国商人に他ならない」（四一頁）までの「中国商人の優勢」を示し、その基盤がギルド体制にあると著者は論ずる（四一―四二頁）。それは、「十九世紀後半期においては、通説と異なつて、外国商人と中国商人との間に大きな矛盾が存在した」（六四頁）との主張につながり、そのギルドが「十九世紀末以降、商會組織に発展した」（六四頁）ことを指摘する。

第二章は一九八三年執筆、一九八六年発表の論文が基礎となっている。ここでは、当時の学界状況をかいま見ることが出来ることではあるが、毛沢東ら中国共産党による「半植民地反封建社会」規定について、これを的確に批判した久保亨氏の論考を引きながら、これを安易に当てはめて歴史事象を解釈してきた従来の方を「結論があらかじめ決められていた」ために「十九世紀後半期の社会経済史像の解明にとって大きな制

約となり、その実像は深く探求されることなく、現在に至っている」(七七頁)と厳しく批判している。言い換えれば、近代中国に対する「半封建半植民地」規定は中華人民共和国成立を終着点として、その終着点を正統なもの前提する立場から歴史を俯瞰する結果論的整理である。著者はまた「中国における『半植民地化』過程とは、資本主義の侵略と、それに対する中国側の抵抗との力関係の過程」(七七頁)であると、一面的な被侵略の側面だけを取り上げること懸念を表す。当然の議論であるが、アヘン戦争によって、天下国家的世界観のなかにあった中国が、主権国家が剥き出しの経済的軍事的闘ぎ合いを展開している国際関係と関係した結果、政治的経済的に従属的な地位に置かれていく過程において、それが一方が無抵抗のまま展開したと考える方が無理がある。さて、筆者はそうした抵抗は「生産を背後で支えていた商品流通」を「不可欠の要因といえる」(七八頁)とし、市場構造から「半植民地化」過程検討の意義を述べる。ま

た、沿岸貿易がこれまでの研究史において等閑視されてきた理由として「対外貿易に比べ、きわめて地味な存在だった」ことと「開港後、……中国商船の沿岸貿易が破壊され、存在しなくなってしまう」と考えられたこと(七九頁)をあげた。後者に関しては、開港後も「沿岸部の商品流通は、五港開港そして天津・北京条約の以後も、変わることなく行われていた」(二〇〇頁)と、先行研究と海関報告などを用いながら論証を行っている。

一九九二年初出の第三章は、「十九世紀後半期、汕頭港を通じて行われた砂糖貿易が潮州地方の社会経済とどう関わり、どのような意義を持ったのかを考察」(二一三頁)する。それを通じて、一八七〇—一八〇年代において「中国沿海市場の全体的好況の中に」潮州地方が社会的安定と富裕化があったものの、一九〇〇年以降に後退した砂糖生産の動きは、「東アジア地域における構造的な市場流通の変化の中でもたらされた」と結論する(一三〇頁)。さらに、著者は潮

州地方と東南アジアとの関係を捕捉し、東南アジアへの潮州の人々の渡航は「東南アジアからの金銭の流入」と東南アジアとの貿易を「渡航の増加にともない拡大する傾向にあ」らしめたと主張し、潮州地方が新たな沿岸貿易を通じて東南アジアとの関係を深めていったことを考察している。

最後の第四章は二〇〇二年初出の論考によっており、最も新しい。ここで著者は、本書の他の部分同様、従来の研究では重視されてこなかった「豆規銀」と「豆規銀本位制」の成立状況を検討する。本書の序章にも「豆規銀」が出てくるのであるが、そこには何の説明もなく、第四章冒頭において「上海両」「九八規元」等とも呼ばれ、一八五〇年代から一九三〇年代の幣制改革のときまで上海商業の地域通貨であった銀領の名称である」が「実銀を持たない架空の銀両(虚銀)であり、一種の計算単位」であり、「国家でなく民間社会における一つの本位貨幣制度」と初めて筆者による説明がなされている(二四一頁)。やや

不親切である。この「豆規銀本位制」研究がほとんど行われてこなかった理由として、筆者は「同時期の太平天国や第二次アヘン戦争の方に研究者の関心が向かったため」（二四二頁）であり、「中国近代における西洋勢力の金融支配という見方と中国自前のシステムである豆規銀生の存在とが矛盾しており、前者の影響が強いため」（二六七頁）とする。前者は革命史に関心が強く向けられていた一九七〇年代初頭までの状況とその反映であろうし、後者は既出の「半植民地」規定にとらわれた社会経済史研究の限界が念頭にある。さて本章では、江浙地方の「銀貴」がスペインドルの流入減少と対外貿易人超による中国内の銀の流出によること（二四八―二四九頁）、その結果起きた最大の問題は「銀納における税負担増加の問題よりも、それに先行して納税者の生活基盤を揺るがした通貨縮小による不況、すなわちデフレーション」（二五一頁）と指摘し、「信用不安によって錢莊手形の流通も縮小したと推測される」（二五一頁）とする。同様に「銀

貴」と通貨危機が出来た上海では、「清朝当局と西洋領事・西洋商人との万全とも思える共同作業」によって導入が図られたメキシコドルではなく「民間の上海商人自身の主体的営為」である「豆規銀本位制」が構築された（二五八頁）とする。その「豆規銀本位制」は、上海の主要業種を網羅する「八業種の商業ギルド」すなわち「質屋・綿布商・錢莊（Bankers）・織物商・北方貿易商・穀物商・米穀商・綿花商」が連署して通貨危機への対処を上海道台に請願したことに始まり（二五八―二五九頁）、その中の錢莊業者が「専ら銀錠に基づく錢莊手形のみを発行する」（二六〇頁）で具体化するが、筆者はこの「銀錠」を「上海両」と同じく豆規銀を指すことは明かである」（二六二頁）とする。そして、利金の徴収に使用するなど清朝の上海当局も豆規銀を認め、「通貨状況が安定を回復」（二六二頁）するに至ったことを指摘する。しかも、「豆規銀本位制は単に上海だけのローカルな制度としてののみ」ならず、「広域的で重層的な金融市場を

形成」していた中国各地に存在する独自の通貨金融機構において「上海の豆規銀本位制はこの頂点に位置していた」（一六五頁）と主張する。なお、こうした中国近代の豆規銀本位制などは「清朝幣制の未整備といった歴史的制約の下で考えられるならば、民間社会の創出した最大限合理的なシステム」（二六五頁）と高い評価を与える。

付編は一九八八年初出である。ここまでの研究論文と打って変わって碎けた調子で語りながら「外国租界の中心、外灘をもって上海の中心とみなす考え方は、私たちの上海観の根底を形づくっている」（二七八頁）など、現地に留学して得た、研究者の足許を相対化するための新たな視角や視野を提示している。

本書の手法は、上記のようにきわめて手堅い社会経済史の手法であり、本文でこそ現代日本語訳の史料を示しているが註には引用資料の原文を収め、読者が原典に当たれるようにしている。それ以外の海関統計なども同様であり、史料を貫て語らせるといふ歴史学の基本姿勢に貫

かれています。その上で、筆者は「沿岸貿易」と「豆規銀本位制」という、従来の研究ではあまり省みられなかつた歴史事象に焦点を当てることで、一九世紀後半の中国における国際経済と地域経済が密接に連関していたこと、それが中国の二〇世紀における「一九一〇年代後半には民族産業の『黄金時代』を迎え」（二九頁）る中国資本主義の展開の基礎となつていったことを明らかにした。そこに描かれているのは、一方的な外国資本主義の侵略とそれに困惑し対応に迫られる中国社会ではなく、困難な状況であることは言わずもがなであつても、それに抗いながら自らの産業を育てていく中国の経済発展の姿であつた。また「買弁」などイデオロギーの手垢にまみれた言葉、歴史用語として概念整理を行い、時代状況を把握するためのひとつの工具としてゐる。これらは、いうまでもなく「半封建・半植民地」規定という一九四九年一月一日を終着点とし、そこに全てが収斂する歴史叙述から生まれ出ることはない。その意味でも、本書は新しい時代の

社会経済史研究であるといえよう。

最後に、若干の疑問を提示して本評を終えたい。まず、筆者は「沿岸貿易」が「深く知られることがなく、研究も分散的であつた」理由として、それが「対外貿易に比べきわめて地味な存在だつた」ことをあげるが（七九頁）、これだけでは理由としてやや薄弱ではないだろうか。また、筆者は第四章において「豆規銀本位制」の成立過程を扱い、その中で「銀貴」について議論しているが、従来の研究では「銀貴」は「銭賤」とセツトとして考察していたのではないだろうか。そうすることにより、銅銭と銀両との交換比率の問題が存在することが明確に見て取れるのである。これについて筆者は「銀貴」をめぐる諸状況」に「銀納における税負担増加の問題」があることを指摘しているが、それよりも「デフレーション」に関心を向けている（一五一頁）。しかし、その理由に関して「深入りせずに簡単に述べるに止めた」とするだけで、「銭賤」の実態とそこから生まれ出た清末農民反乱の諸相と

の関連には言及がない。清末のデフレ状況に関する研究が不足していることには同意するが、「銀貴銭賤」が生み出した社会的影響が見えにくくなつてしまったのは残念である。その他、すでに指摘したことでもあるが、いくつかの歴史用語についての説明が初出ではなく、後になつてから出てくるのが散見された。

本書には索引がついているのでそれを利用すれば事足りるのであるにしても、また編集段階の問題でもあろうが、本書を利用しにくくしているのは残念であつた。

とまれ、中国近代社会経済史研究という豊富な研究の蓄積のある分野に、またひとつ新たな問題意識を持った書物が加わつたことは喜ばしいことであり、歴史研究が常に現代を意識しつつ進められなければならないことから、本書の刊行は大きな意味を持つと言わねばなるまい。